

令和2年度 国文学科 中期日程入学試験講評

(一) 現代文

【出題意図】

問題文は『日本詩歌の伝統——七と五の詩学』（川本皓嗣著）の中の「俳句の詩学」から抜粋した。芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」を題材にして、なぜこの句が詩的感興をそそるのかを、十七字の語の連りのなかに見出される重層的な関係性のありようを明らかにしながら説明した文章である。本文の内容理解を測ることを中心に作問した。

【採点のポイント】

問一

漢字の読み書き。文脈に即して正しく読めているか、書けているか。

問二

「気になり」「引っかかる」という表現から「抵抗」がよりふさわしいと気付けるか。

問三

「二つの矛盾」が何であり、「前者」、「後者」が具体的に何を指しているか、きちんと捉えることが前提となる問いである。「二つの矛盾」のうちの「前者」、つまり、「蟬の声」が「岩にしみ入る」という点が捉えられているか。そして、「矛盾」のありようを具体的に説明できているかが本問のポイントである。

問四

本問において求められているのは、浸透しがたい固さを代表する岩に蟬の声がしみとおるといふ表現の特徴を説明し、その意外性がかえって感じる主体すなわち人間としての語り手の存在を読者に感じさせるという機微まで説明することである。どのような仕組みを通じて、どんな語り手の存在が、誰にどう認識されるのか。これらのことをしっかりと説明できているかどうか本問のポイントである。

問五

読み取らなければならないのは、「基底部の矛盾」と「干渉部の矛盾」という二つの矛盾のうち、前者である。この「基底部の矛盾」は、「岩にしみ入る蟬の声」というひと続きの語句のなかに見出せる矛盾であり、これを説明するために筆者は、「声」が液体にたとえられていることや、固い「岩」のイメージによる対極化や誇張という論点を提示している。その上で、「ところでこのように深く語り手の心にしみたものは、一体何だったのだろうか」という問いを立て、「ひとつの可能性としてすぐに連想されるのは（中略）蟬に対する哀れみの情、ひいてはこの世の無常一般に対する感慨だろう」という仮説を提示している。しかしこれは、あくまでも「基底部の矛盾」を考える中で出てきた「連想」であり、「当て推量」に過ぎない。一句全体の意義を考えるには、「干渉部の「干渉」、すなわち「干渉部の矛盾」というもう一つの矛盾について考える必要がある。ここまでの理路をしっかりと押さえた上で、傍線部の「先回り」とはどういうことかをわかりやすく説明できているかどうか本問のポイントである。

問六

本文の後半で論じられていることでまずもって大事な点は、著者が「閑かさや」の句の中に「騒」と「閑」の対立と一致を見ているという点である。この対立と一致によって現出する「一種特異な境地」こそが著者の考える「深く語り手の心にしみたもの」の内実である。このことを「閑かさや」の句に即して抽象的でないことばでわかりやすく説明できているかどうかの本問のポイントである。

【講評】

問一

㊦「はぶ(く)」、㊧「余談」と誤るもの、㊨「瞭」の偏を誤るものが多かった。

問二

「不満」を選んだものが目立った。

問三

誤答例として、「矛盾」の意味するところの記述がない、あるいは、具体的でない記述がみられた。「矛盾」は、気体や液体でない「声」と、容易に浸透を許さないはずの「岩」との対比において成立するわけだが、単に「声」の特性のみ論述している事例も散見した。

また、「どのような点に現れているか」と問うているのに、解答の末尾を「～こと」「～から」と、問い方に正対していない事例も散見された。

問四

誤答の例として「固い岩にまでしみいるということは人間にもよりしみいるだろうと想像させる」といった形で表現の誇張や意外性のみを説明したものが目についたが、本文の筆者は、表現者としてあえて「しみいる」を用いた「語り手」に注目している。

表現の解釈だけでなく、「語り手」の心身に起きたことだけでなく、表現行為によって語り手そのものの存在感を、「われわれ」＝「読み手」側に気づかせる契機があることについて説明してほしい。

問五

「句のことば自体による指示」という表現が、「基底部の矛盾」についてのものではなく、じつは一句全体の意義を考えるための「干渉部の干渉」、すなわち「干渉部の矛盾」に関わる表現であるということに留意したい。「基底部の矛盾」について丹念に読み取った上で、それを「干渉部の干渉」との関係の中で理解しなければならない。

このように、さまざまな水準の対比を丁寧に整理して読み取りを行う必要があるが、部分的な理解にとどまっていると思われる答案が目立った。

問六

対立と一致の境地について説明を試みつつも、本文のことばをただ切り貼りしただけに終わっている不得要領な消化不良の解答が多く見られた。部分的にそれらしく書いていても、全体として意味をなさない文の解答では評価に値しないということを肝に銘じてほしい。

また、「この世の無常一般に対する感慨」こそ「深く語り手の心にしみたもの」である

とする解答も意外なほど多く見られた。これは著者が「たんなる当て推量」として否定している解釈である。恐らく本問でこのように解答した者は、問五においても十分な解答をなし得てはいまい。出題者としては、問五における理解を、次の問六における解答に活かしてほしいというねらいを持っていたが、この点残念であった。それこそ「当て推量」ではない、著者の展開する理路をしっかりと理解したうえでの解答が求められる。

(二) 古文

【出題の意図】

藤原定家の作と考えられる『松浦宮物語』から、主人公橘氏忠が唐に渡り、華陽公主から琴を習った後、氏忠が公主を恋慕しつつも会うことがかなわない場面を、読解の対象として取り上げた。物語の文章や和歌を正確に読解し、人物の心情を的確に把握できているかを問うことが主眼となっている。

【採点のポイント】

問一

基本的な語の意味、語法が理解できているか、確かめる問題。(1)は「ながむ」に「物思いにふける」の意があり、「られ」は自発の意であること、(2)は「え～ず」が「～できない」の意を表すことがとらえられ、訳出されているかがポイントとなる。

問二

助動詞の意味、活用による語形変化について、基本的な知識が備わっているかをみる問題。助動詞が正確に抜き出せていることが、得点の前提となる。

問三

和歌の表現から詠者の状況を読み取る問題。「露けき」が華陽公主を恋慕ってこぼれる涙で湿っぽくなっている氏忠の様子を表していることを把握できているかがポイントとなる。その上で「いとど」に表される脈絡、すなわち、どのような様態に加えてますます「露けき」なのかの説明が求められる。

問四

主人公の和歌を解釈し、心情を読み取る問題。「恋だにみばや」が氏忠の華陽公主への恋心を表していることをとらえたうえで、「だに」の含意の内容、琴との関わりが、適切に示されていることが求められる。

問五

「誰」について「御門」、「どのような」について「華陽公主をこの上なく大切にしている」と、的確にとらえられているかがポイント。華陽公主を主語として、御門にこよなく大事にされている趣旨を示している答案も可とした。御門による待遇であることが明示されていないものは、減点した。

【講評】

問一

(1)「ながめられて」の「られ」(自発)の意味をきちんと訳出している答案が予想して

いたよりも多く見られ、うれしいことであった。助動詞の文脈に即した訳に留意したい。
(2) おおかたはよくできていたが、「え～ず」の用法という基礎的知識を欠く答案も見られたことは残念である。

問二

助動詞の意味・用法という文法の基本事項をきちんと理解している答案とそうでない答案とがはっきり分かれていた。作品をきちんと読解するためにも、文法の知識はしっかり身につけておいてほしい。

問三

「露けき」が氏忠の「涙」を連想させる表現であることを読み取れたかどうかで解答の出来が大きく分かれた。旅寝の心細さの上にこれまで経験したことのない華陽公主への恋の物思いが加わり、涙に濡れて夜の雨がさらに露っぽくなる。「旅寝」「公主への恋の思い」は直前の本文で触れられていることもありよく読み取れていたが、「涙」を読み取れずに、「一段とひどく雨が降る」「(露のような)大粒の雨が降る」といった解答が散見された。

問四

ほとんどの答案は、「誰の」「どのような心情」か説明を求める問いに対応する形で書かれていた。歌の詠み手である氏忠の心情であることも、おおかたの答案で示されていた。心情は「華陽公主への恋の思い」が軸になるが、これがしっかり明示できているかどうかで得点が分かれることとなった。「恋だにみばや」について、「恋の気持ちを見たい」などと理解がずれてしまっているものも散見された。また、「だに」の含意は、歌が詠まれるまでの文脈から、「華陽公主に会いたいののに会えず、ならばせめて・・・」と考えられるであろう。こうしたところも含めて、しっかり書かれている満点答案も複数みられた。

問五

「誰」について御門と示している答案が予想より多く、全体的に結果は良好であった。傍線部直前の「いまの御門のひとつ后腹(きさきばら)にて」は、華陽公主が御門と母を同じくする姉妹であることをいうが、この理解が難しかったのであろう、御門と華陽公主の関係を誤っているものもあった。これらは、誤記分の減点とした。

(三) 漢文

【出題意図】

今年度は『韓非子』からの出題。総字数百字余りで、ほぼ例年なみの長さの文章。返り点・送り仮名を手がかりに内容を正しく読み取る力を備えているか、また、返り点の付け方や、基本的な語句の読みなど、漢文を読むための基礎的な学力が定着しているかを主眼に出題した。

【採点のポイント】

問一

基本的な語彙についての読み方を問う問題。A「いかん」は頻出の熟字訓。B「若」は

「ごとし・もし・しく・なんぢ(じ)」等、様々な意味用法のある重要助字。どちらも基礎的な学力を問う問題。Aは「いかん」・「いかんと」どちらも正解とした。Bの読みは「ごと」であるが、一文は「かの過行のごとき(は)、是れ細人の識る所なり」と読み、前半部は主部になることから、「ごとき」・「ごときは」を正解とし、「ごとく」・「ごとし」等の解答は減点とした。

問二

内容の読解ができていないかを問う問題。登場人物は「魯穆公・子思・龐カン(米+聞)氏之子・子服厲伯」の三人だが、問題文二行目冒頭の「曰はく」以降、「臣不知也」までが子思の会話部分であることが分かれば、容易に正解できるはず。

問三

書き下し文に従って返り点を正しく付けられるかをみる問題。完答のもののみ、点数を与えた。返り点を付ける問題は、ほぼ毎年出題している。入門期の学習が定着していれば、平易な問題。完答の場合のみ点数を与えた。本学科受験を希望する者は、返り点の付け方ぐらいはしっかりと学習しておいてほしい。

問四

問題文の文章が読解できているかを問う問題。穆公の問いに対する、子思と子服厲伯の回答が対照的であることが分かれば、それほど難しい問題ではなかったはず。誤字は減点、二十五字に満たない答案は0点とした。

【講評】

問一

Aはおおむねよくできていたが、Bについて、「ごとし」・「ごとくは」と答えている者も少なからずいた。文脈を考え、正しく活用すること。

問二

おおむねできていた。しっかりと勉強しておきたい。

問三

予想していたよりは正解率が低かった。「未」が再読文字であることを知らない者が少なくなかったし、一二点を使うべきところで上下点で解答しているものも散見された。過去の問題でも、書き下し文に基づいて返り点を付けさせる問いは出題されているので、しっかりと学習しておきたい。

問四

予想していたより正解率が高かった。多くの受験生は、子思と子服厲伯とが対比的に書かれていることを、ほぼ理解できていたようである。ただ、同じ語句を複数回用いるなど、与えられた字数の中での的確にまとめきれない答案が少なくなかった。字数制限のある問題の演習も、普段からしっかりとやっておきたい。